

気象講演会

入場無料・予約不要

気象と漁業

Chain of changes

－ 気候変動がもたらす極端な気象現象と水産資源の変化の連鎖 －

令和元年12月7日(土)

午後1時30分～午後4時

[開場:午後1時]

弘前大学創立50周年記念会館

「みちのくホール」

(弘前市大字文京町1番地 弘前大学構内)

講演Ⅰ

「近年の極端な気象現象の変化と豪雨をもたらす線状降水帯」

気象庁 気象大学校 教頭

加藤 輝之 氏

講演Ⅱ

「気候変動と日本の水産資源・旬の食卓の変化」

国立研究開発法人水産研究・教育機構

東北区水産研究所 資源環境部 沿岸資源グループ長

木所 英昭 氏

画像：ひまわり9号(待機運用中)によるトゥルーカラー再現画像 (2018/10/15 11:50(JST))

主催 日本気象学会東北支部
共催 弘前大学大学院理工学研究科、青森地方气象台
後援 青森県、弘前市、青森河川国道事務所、日本赤十字社青森県支部、日本気象予報士会東北支部、
東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、FMアップルウェブ、地球ウォッチャーズ-気象友の会-
問合せ先 青森地方气象台 TEL 017-741-7413

講演要旨



講演Ⅰ：「近年の極端な気象現象の変化と豪雨をもたらす線状降水帯」

気象庁 気象大学校 教頭

かとう てるゆき

加藤 輝之 氏

近年、地球温暖化により豪雨や異常高温など頻発するようになったと言われています。その変化や要因について豪雨に着目して説明します。また最近、線状降水帯という言葉が報道等によく使われるようになってきています。気象庁の用語集には、「次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）が列をなした、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50～300km程度、幅20～50km程度の強い降水をともしう雨域」と定義されていますが、量的な定義はなされていません。これは、線状降水帯の発生が豪雨を引き起こし、土砂崩れなどの気象災害などに直結するため、大雨に関する注警報と同様に地域差があるためです。

線状降水帯という言葉は、平成になってから講演者やその周辺で使われ出した非常に新しい用語ですが、上述のように豪雨を議論する上では、重要なキーワードとなります。

本講演では、線状降水帯に着目し、豪雨の発生メカニズムや予測可能性についてもわかりやすく解説します。



講演Ⅱ：「気候変動と日本の水産資源・旬の食卓の変化」

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

東北区水産研究所 資源環境部 沿岸資源グループ長

きどころ ひであき

木所 英昭 氏

魚の不漁の話題が毎年のようにニュースで報道されます。不漁要因として、乱獲による資源減少の他、自然の海洋環境の変動による影響があります。一般的にウナギやマグロ類は乱獲による影響が強いとされるのに対し、イワシ類は海洋環境の変化を強く受けて好不漁が続くとされています。また、近年のサンマの様に両方の影響を受けて不漁になっていると考えられる魚もあります。私たちの食卓に上がる魚介類の多くは天然資源に依存しているため、人間活動ばかりでなく自然環境の影響も大きく受けて変化する特性があります。さらに近年では、地球温暖化に伴う海水温の上昇によって魚介類の分布が変化し、従来とは異なる地域や季節で漁獲されることも注目されています。

例えば、水温上昇によって暖水性のブリやサワラが日本海や北日本で多く漁獲されるようになりました。その一方で、名産地として名高い北陸地方の寒ブリは、高水温によって沿岸域に来遊しにくくなり、漁獲量が伸び悩む年が多くなっています。

気候変動と漁業資源との関連については明らかでない部分も多いのですが、今後の気候変動の進み具合によっては魚介類の分布が大きく変化し、日本の水産資源や、旬を重視する私たちの食卓が大きく変わっていくかもしれません。産地や旬の変化に対応していくことが今後の私たちの食生活に求められます。



弘前駅からの交通案内

- ・徒歩の場合・・・約20分
- ・タクシー利用の場合・・・約5分
- ・弘南バス利用の場合・・・約15分

「小栗山・狼森線」または「学園町線」に乗車、

【弘前大学前】、または【弘大農学生命科学部前】で下車

※ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。